



Title	< >か<- >か- 『ムスチスラフ福音書』における < I-A > の場合-
Author(s)	岩井, 憲幸
Citation	明治大学教養論集, 446: 1-22
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7140">http://hdl.handle.net/10291/7140</a>
Rights	
Issue Date	2009-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 〈ЖЕ〉か〈-ЖЕ〉か

—『ムスチスラフ福音書』における〈ИКОЖЕ〉の場合—

岩井憲幸

### はじめに

我々は数年来、『ムスチスラフ福音書』（Мстиславово евангелие。以下 Mst と略称する）の研究を行っており<sup>(1)</sup>、並行して索引の作成も計画をしている。Mst は 1117 年以前にルーシで成立したとされ、したがってロシア教会スラブ語（slavon russe）ないし古代ロシア文語（древнерусский литературный язык）というべきだが、ロシアにおける文語成立の萌芽期につき研究を重ねている立場からは、古代教会スラブ語（Old Church Slavonic）の地方的変種のひとつと看做しうる<sup>(2)</sup>。

Mst の原本は閲覧が難しく、研究はもっぱら次の刊本によっている。

Л. П. Жуковская, Л. А. Владимирова, Н. П. Панкратова, Апракос Мстислава великого, М., 1983.

この書は、国際スラヴィスト会議に向けて当時のソ連科学アカデミー・ロシア語研究所より、Жуковская 監修の下に出版された、すぐれた学術刊行物である。しかしながら、我々の索引作成のためにこの刊本テキストを電子化した際、思わぬ問題につきあたった。Жуковская らの刊本（以下 Ž と略称）は、索引も付されているのだが、我々は正順と逆順の両索引作成をめざしていることから、屋上屋を重ねることに近い作業を行なわざるをえなかった。

さてここでひとつの問題が出来た。Particula の〈ЖЕ〉にかかわる問題である。OCS の〈ЖЕ〉は、言うまでもなく、coniunctio として用いられる場合と、particula として用いられる場合とがある。これを判別しなければならない。前者では、文頭につく第二の位置に出現することが多い。後者の一部も同様の性質をもつ。すなわち語の次に出現する。しかしこれのみで両者を区別する基準とはならず、困難をいや増すのみである。さらに次のような事情もこの問題をややこしくしているのである。すなわち、写本原本においては続け書きが常であるから、したがって、テキスト刊行の際に〈ЖЕ〉をどう処理するかは、いつに校訂者の考えと判断にかかっている。その場合、いわば語源的解釈の立場にたつものと、語の意味を尊重する立場にたつものと、おおかた二つに分かれるのである。今日では後者が主流と目されるが、旧ソ連邦の学界においては前者の立場によって多くの刊行がなされた。そして Z もかかる方針に依っているテキストなのである。〈ЖЕ〉をすべて独立させて表記すれば、索引における語の認定に困難を生じることは必定である。そこで我々は次のような方策を講ずることにした。

Mst の内容はいわゆる full aprakos である。これに相当するテキストの刊本は見当たらずから（『ミロスラフ福音書』については別途扱う）、まず OSC のカノンのひとつであり、四福音書である『マリア写本』（Codex Marianus. 以下 Mar と略称）のテキストと Mst のそれを対照させた。これにより、多くが解決されたが、若干の未解決部分も残った<sup>(3)</sup>。

本稿はこの未解決部分のうち、もっとも判別に困難さを感じた〈IAKO ЖЕ/IAKOЖЕ〉につき、具体的に検討し、結論を得んとする試みである。判別を困難にさせている最大の原因は、テキストに reduction が存するからである。キュリロス=メトディオス期の OCS テキストが、直線的に Mst のテキストにつながっているわけでは無論なく、しかもこの間に多くの missing link が存在し、かつ又 Gr. テキストにこれが多い。一方、Mst はその後のルーシのテキストに多大な影響を与えたことはいなめぬ事実なのである。

〈IAKO ЖС/IAKOЖС〉の問題はささやかなものではあるが、検討するに値するものとする。

1. Mst のテキストは  $\tilde{z}$  に依ることは前述した。さらに本稿では比較・対照のために、次の諸本を参照する。本稿での略号、名称、成立地、成立時期、使用文字の別、内容の順で列挙する。(6までは SJS に依拠<sup>(4)</sup>。それ以下は各々に各国語の通称を用いる)。

1. Mar : Codex Marianus. Macedonia, X-XI, glag., tetra.
2. Zog : Codex Zographensis. Macedonia, X-XI, glag., tetra.
3. Ass : Evangeliarium Assemani. Macedonia, X-XI, glag., aprakos.
4. Sav : Liber Sabbae. Bulgaria, XI, cyr., aprakos.
5. Ostr : Evangerialium Ostromiri. Russia, XI, cyr., aprakos.
6. Arch : Архангельское евангелие. Russia, 1092, cyr., aprakos.
7. Miro : Мирослављево јеванђеље. Serbia, XII, cyr., aprakos.
8. Vrac : Врачанско евангелие. Bulgaria. XIII, cyr., aprakos.

このうちいわゆる canon は、 $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4$  である。又、 $5 \cdot 6 \cdot 8$  は short aprakos であり、7のみ full aprakos である。(以上諸本の刊本については〈参考文献 A〉を見よ)。

さらに次の再構テキストも参照する。キュリロス=メトディオス期のテキストを想定するゆえである。

9. Vajs : J. Vajs, Evangelium Sv. Marka, Text rekonstruovaný, V Praze, 1927, 1935 ; Evangelium Sv. Matouše, Text rekonstruovaný, V Praze, 1935 ; Evangelium Sv. Lukáše, Text rekonstruovaný, V Praze, 1936 ; Evangelium Sv. Jana, Text rekonstruovaný, V Praze, 1936.

また「マルコ伝」に限り、次の書も参照する。

10. Vosk : Г. Воскресенский, Евангелие отъ Марка по основнымъ

спискамъ четырехъ редакцій рукописнаго славянскаго евангельскаго текста [...], М., 1894.

この書には1144年『ガリツィア福音書』(Galと略称), Mst, 他にロシア14世紀の2写本の4テキストを併載する。ただし, Дурновоの評するように<sup>(6)</sup> やや学問的厳密さを欠く所もあるが, 第一にGal刊本が身近に参照できぬために, 第二にMstがいかに表記されているか参考とするために, 引用する。

次の書は現行のロシア教会スラブ語による聖書で, 現状を知るために参照した<sup>(6)</sup>。

11. 1997 : Библия, Книги священного писания ветхого и нового завета на церковнославянском языке [...], Российское библейское общество, М., 1997

現行ロシア語訳聖書は2004年刊を使用した(〈参考文献A〉を見よ)。

ギリシア語(Gr.)テキストは, Nestle-Alandの第27版を主とするが, 時にVajs所載テキストも参照する。VajsのGr.テキストは, いわゆるtextus receptusだが, ごく一部に推定による改変が示されている<sup>(7)</sup>。和訳文は日本聖書協会訳を主とし, 時に岩波版による訳も参照した(以上の正式書名等は〈参考文献A〉につかれよ)。

2. 本題に移る前に〈ЖЕ〉につき, 一般的な見解を見ておく必要がある。幸い, 1966年に刊行が開始されたSJSが1997年に完結し, さらに2006年にサンクト・ペテルブルク大学によるリプリント版が刊行され, 学者達に多大な裨益を与えており, 本稿でも第一にこのSJSに依りたい。

〈ЖЕ〉はまずconiunctioとparticulaに大別されることは上述したが, 後者に他の語彙と結びつくものが存するのである。

SJSは, これら他の語彙と結びつくparticulaをさらに次のように4種に分類して記述する。今, 簡潔にただし例語はもろさずに引用すれば, 次の通りである。

1. 元来の代名詞, 関係副詞, 一部の接続詞と: 例 ИЖЕ, ЯКЪЖЕ, ЯКОВЪЖЕ, ВЪНІЄГДАЖЕ, ДОНЪДЕЖЕ, ДОНЪЖДЕЖЕ, ДОНЪЖЕ, ДОНІЄЛИЖЕ, ДОНІЄЛЪЖЕ, ОТЪНІЄЛИЖЕ, ОТЪНІЄЛЪЖЕ, ЗАНІЄЖЕ, ПОНІЄЖЕ, ИМЪЖЕ, ИДЕЖЕ, ИЖДЕЖЕ; ЫДОУЖЕ, ОТЪНЪДОУЖЕ, ЯМОЖЕ, ІЄЛИКОЖЕ, ІЄЛЬМАЖЕ, ІЄЛЬМИЖЕ, ІЄЛЬЖЕ, ЯКОЖЕ; — КАМОЖЕ, КЪДЕЖЕ, ОТЪКЪДОУЖЕ.
2. 元来の指示代名詞, 指示副詞, 指示接続詞と: 例 ТЪЖЕ, ТОЖЕ, ТЪМЪЖЕ, ТАКОЖЕ, ТЪГДАЖЕ; ТАЖЕ, ТЪЖЕ.
3. 否定代名詞, 否定副詞と: 例 НИКАКОВЪЖЕ, НИКАКОЖЕ, НИКАКЪЖЕ, НИКАКЪИЖЕ, НИКАМОЖЕ, НИКОГЪДАЖЕ, НИКОЛИЖЕ, НИКОТЕРЪИЖЕ, НИКОТОРЪИЖЕ, НИКЪДЕЖЕ, НИКЪТОЖЕ, НИКЪИЖЕ, НИЧЪТОЖЕ, НИІЄДИНЪЖЕ.
4. ある一定の語彙と: 例 ДАЖЕ, НЕЖЕ, ОУЖЕ, ЮЖЕ.

このうちもっとも判別しやすいのは上記中, 第3項であろう。〈НИІЄДИНЪ〉〈НИКОГЪДА〉等〈-ЖЕ〉を有さぬ形も存在する語彙もあるが, これら否定辞を伴う場合は, 多くのケースで一義的に, 〈-ЖЕ〉は続いており, 一綴りとみることができる。

3. 本題に戻る。〈ЯКО ЖЕ/ЯКОЖЕ〉のケースをとり上げる。二語の場合と, 一綴りの場合とがありうるから, 一義的に決定することはできない。当然のことながら, 文意を斟酌しなければならない。

検討する必要のある個所は23である。このうち1箇所は, 二綴りの可能性がある。そこで, まずOCSの最初期ではどうであったと推定されるか, どの語が用いられ, いかなる意味であったかを第一の参考とし, ついで他本との比較・対照によって, 一綴りか否かを判定したい。最初期のOCSのテキストを, Vajsの再構テキストとここでは定める。当該部のVajsでの形態に従い, 次に意味を検討する。Cf. 以下の他本での状況は, 上述の reduc-

tionの問題と密接にかかわることは言を俟たない。

以下、例文には通し番号を付し、MstはŽのまま引用するが、一綴りとすべき箇所には二重の下線を施す。ともに問題とすべき箇所のある場合は、ひとえの下線を施す。和訳はあく迄目安と考えられたい。

1) Vajs : ЯКОЖЕ

- ① Mc 14.72 (115в-15) : И ВЪТРОЖЕ КОУРЪ ВЪСПѢ И ПОМАНΟΥ ПЕТРЪ ГЛАГОЛЬ ЯКО ЖЕ РЕЧЕ ЮМОУ ІСЪ. ПРѢЖЕ ДАЖЕ КѢРЪ НЕ ВЪСПОЮТЬ ДВАШДЫ ОТЪВЪРЖЕШИ СА МЕНЕ И ТРИШДЫ. И НАЧЪНЪ ПЛАКААШЕ СА. ; するとすぐ、にわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして泣きつづけた。

Vajsは該所のGr. テクストを〈ως〉と再構する。〈δ〉あるいは〈οδ〉の異文を有するが<sup>(8)</sup>、Nestle-Aland 27版も〈ως〉とし、岩波版は〈…とイエスが彼に語った時の言葉を思い出した。〉と「時」の意と解する。Cf. ①Sav —<sup>(9)</sup> ; Ass — ; Mar ИЖЕ ; Zog ЪКОЖЕ ; Ostr ИЖЕ ; Arch — ; Vosk Mst ЯКОЖЕ, Gal АКОЖЕ ; Miro — ; Vrac — ; 1997 ЕГОЖЕ.

- ② Mt 13.40 (40б-11) : ЯКО ЖЕ ОУБО СЪБИРАЮТЬ ПЛЕСВЕЛЫ И ОГНЪМЪ ИЖДИЗАЮТЬ Я. ТАКО ЖЕ БОУДЕТЬ ВЪ СЪКОНЪЧАНИЕ ВЪКА СЕГО. ; だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終りにもそのとおりになるであろう。

Gr. テクストは〈ωσπερ〉である。〈～のように〉の意。Cf. ②Sav — ; Ass ЪКОЖЕ ; Mar ЪКО ; Ostr ЯКО ЖЕ ; Arch [Я]К[О] ; Miro ЪКОЖЕ ; Vrac — ; 1997 ЯКОЖЕ.

- ③ Mt 21.6 (129г-11) : ШЪДЪША ЖЕ ОУЧЕНИКА СЪТВОРИСТА ЯКО ЖЕ ПОВЕЛЪ ИМА ІСЪ. ; 弟子たちは出て行って、イエスがお命じになったとおりにし、

Gr. テキストは 〈καθ' ὧς〉で、〈～とおりに／ように〉の意。Cf. ③Sav ЯКОЖЕ ; Ass ЪКОЖЕ ; Mar ЪЖЕ ; Ostr ЯКО ЖЕ ; Arch — ; Miro ЪЖЕ ; Vrac ; — ; 1997 ЯКОЖЕ.

- ④ Mt 26.39 (143a-21) : И ПРЭСЬДЪ МАЛО ПАДЕ НИЩЬ МОЛА СА И ГЛА. ОЧЕ МОИ АЩЕ ВЪЗМОЖЬНО ЮСТЬ ДА МИМОИДЕТЬ ОТЪ МЕНЕ ЧАША СИ. ОБАЧЕ НЕ ЯКО ЖЕ АЗЪ ХОЩЮ НЪ ЯКО ЖЕ ТЫ. ;そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい」。

Vajs は 〈НЕ ЯКОЖЕ…НЪ ЯКОЖЕ…〉と再構し、Gr. テキストは 〈οὐχ ὧς…; ἀλλ' ὧς…〉と、ともに 〈ὧς〉、すなわち〈～のように〉の意である。Cf.

④Sav ЯКОЖЕ…ЯКОЖЕ ; Ass ЯКОЖЕ…ЪКО ; Mar ЪКО…ЪКОЖЕ ; Ostr ЯКОЖЕ…ЯКОЖЕ ; Arch ЯКОЖЕ…ЯКОЖЕ ; Miro ЪКОЖЕ…ЪКОЖЕ ; Vrac ; ЯКЖЕ…ЯКОЖЕ ; 1997 ЯКОЖЕ…ЯКОЖЕ.

以上①～④は最初期のテキストを継承したものとして、一綴りとみてよい。

2) Vajs : ЯКО ЖЕ

- ⑤ Mt 24.38 (66в-6) : ЯКО ЖЕ БО БЪАХОУ ВЪ ДНІИ ПРЕЖЕ ПОТОПА ЯДОУЩЕ И ПИЮЩЕ. ЖЕНАЩЕ СА И ПОСАГАЮЩЕ. ДО НЕГО ЖЕ ДНІЕ ВЪНИДЕ НОЈЕ ВЪ КОРАБЛЬ ;すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつきなどしていた。

この verse は Mst 後半にもう一度あらわれる。小異があるので、全文を引用する。

- ⑥ Mt 24.38 (136a-3) : ЯКО ЖЕ БО БЪААХОУ ВЪ ДНІИ ПРЕЖЕ ПОТОПА ЯДОУЩЕ И ПИЮЩЕ ЖЕНАЩЕ СА И ПОСАГАЮЩЕ. ДО НЕГО ЖЕ ДНІЕ ВЪНИДЕ НОЈЕ ВЪ КОВЬЧЕГЪ

Vajs は Gr. テクストの <ὡσπερ γάρ><sup>(10)</sup> に対し、〈IAKO ЖЕ БО〉と3語に分けて再構する。Cf. ⑤⑥Sav IAKOЖE BO ; Ass ЪKOЖE BO ; Mar ЪKO BO ; Zog ЪKOЖE BO ; Ostr IAKO ЖE BO (83o6, 146o6) ; Arch IAKOЖE BO ; Miro ЪKOЖE BO ; Vrac IAKO ЖE BO ; 1997 IAKOЖE BO.

Vajs は、Mt 24.37 冒頭 <ὡσπερ δὲ> については〈IAKOЖE BO〉と2語を再構する。Cf. Sav IAKO (476), IAKOЖE BO (886) ; Ass ЪKOЖE BO (49d, 84d) ; Mar ЪKOЖE BO ; Zog ЪKOЖE BO ; Ostr IAKO ЖE BO (83o6, 146o6) ; Arch IAKOЖE BO ; Miro ЪKOЖE BO ; Vrac IAKO ЖE BO (122, 159) ; 1979 IAKOЖE (BO…).

Mt 24.37 および同 38 の <ὡσπερ> は〈ちょうど〜のように〉の意で、同義とみられる。問題はその後が続く <δέ> と <γάρ> であろう。前者は単に文の連結を示す語であり、後者は説明ないし例示を示し、〈すなわち〉ほどの意か。OCS のテキストで <γάρ> を〈BO〉とあてることは通常であり、こちらは容易に首肯できる。一方、<δέ> だが、普通は〈ЖЕ〉をあてることが多く、おそらく Mt 24.37 の〈BO〉は、かかる〈ЖЕ〉とほぼ同義とみられる。K. H. Meyer<sup>(11)</sup> に依れば、『スプラシル写本』(Supr) において、<γάρ> を〈BO〉にあてるのが626回に対し、<δέ> にあてるものが16回ほど見られる(逆に <δέ> に対し〈ЖЕ〉をあてるものが1230回、<γάρ> に対して〈ЖЕ〉をあてるものが10回)。さらに推量すれば、Mt 24.37 において初めに〈IAKOЖE〉を選択したため、次に〈ЖЕ〉を重ねることを避け、これと同義と推定する〈BO〉を後続させたか。なお、SJS は〈IAKOЖE BO〉をセットで <ὡσπερ/ὡς> にあてている。

Sav の 47o6 には、88o6 が他本と同様に〈IAKOЖE BO〉とするのに対し、次のように異なる訳を示している。

Sav (47o6, 新 496) Mt 24.37 : IAKO ДНИС НОЄВИ • ТАКО БЃДЕТЬ  
ПРИШЪСТВИС СЃА [以下欠]

1997 が次のようにカッコを用いてこの verse を示すのは、Sav のかかる訳

を意識していることではなからうか。

1997 Mt 24.37 : ЯКОЖЕ (БО БЫСТЬ ВО) ДНИ НОЕВЫ, ТАКО  
БЪДЕТЬ И ПРИШЕСТВІЕ СНА ЧЛВЪЧЕСКАГО :

さらになお、2004年刊ロシア聖書協会のMt 24.37, 38の訳は次の通りであり、〈но〉〈ибо〉と補っている。

Mt 24.37, 38 : Но, как было во дни Ноя, так будет и в пришествие Сына Человеческого : Ибо, как во дни перед потопом ели, пили, женились и выходили замуж, до того дня, как вошел Ной в ковчег, 結論を言えば、⑤⑥は〈ЯКОЖЕ〉と一綴りでよいのではないか。VajsがMt 24.38で〈ЯКО ЖЕ〉と二綴りにしたのは、Marを尊重するがゆえではないかと考える。それでも、他の古写本と比較する時、その判断を十分に理解するのはやや困難である。

3) Vajs : ЯКО

⑦ Mc 2.12 (125в-24) : И ВЪСТАВЪ АБИЕ И ВЪЗЪМЪ ОДРЪ ИЗИДЕ ПРЕДЪ ВСЪМИ \*ЯКО ЖЕ ДИВИТИ СА ВСЪМЪ. И СЛАВИТИ БА ГЛЮЩЕ. ЯКО НИКОЛИ ЖЕ СИЦЕ ВІДЪХОМЪ : ~ ; すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見ることがない」と言った。

Gr. テキストは〈ὡστε〉であり、〈それ故に〉の意である。Срезневскийは<sup>(12)</sup>〈ЯКО ЖЕ〉とこの意味の場合は2語に分けて掲出するが、Suprでの多用を見る時、一綴りでよいと考える。Cf. ⑦Sav И ; Ass ЪКО ; Mar ЪКО ; Ostr ЯКО ; Arch ЯКО ; Vosk Mst ЯКОЖЕ, Gal ЯКО ; Miro ЪКО ; Vrac ЯКО ; 1997 ЯКΩ.

Gr. テキストが〈ὡστε〉であるのは、以下の例も同様である。⑧⑨ともに一綴りでよい。

⑧ Mc 4.32 (596-17) : И ЮГДА ВЪСЪЯЮ БЪДЕТЬ ВЪЗДРАСТЕТЬ

И БОУДСТЬ БОЛЈЕ ВСѢХЪ ЗЕЛИИ. И ТВОРИТЬ ВѢТВИ ВЕЛИКЫ  
ЈАКО ЖЕ МОЩИ ПОДЪ СЪНИЮ ЮГО ПТИЦАМЪ НБСЪНЫМЪ  
 ГНѢЗДИТИ СА.; まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくな  
 り、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」

岩波版は〈…巨大な枝を張る。そのため、その陰で、…〉と明確に訳す。

Cf. ⑧Sav — ; Ass — ; Mar ЪКО ; Ostr — ; Arch — ; Vosk Mst  
 ЈАКОЖЕ, Gal ЈАКО ; Miro ЪКО ; Vrac — ; 1997 ЈАКΩ.

⑨ Mt 13.54 (1826-19) : ВЪ ОНО ВРѢМА. ПРИДЕ ІСЪ ВЪ ОТЬЧЬ-  
 СТВО СВОЮ. И ОУЧААШЕ НАРОДЫ НА СЪБОРИЩИИХЪ. ЈАКО  
ЖЕ ДИВИТИ СА ИМЪ И ГЛАТИ ОТЬКОУДОУ СЕМОУ ЮСТЬ  
 МОУДРОСТЬ СИ И СИЛЫ.; そして郷里に行き、会堂で人々を教え  
 られたところ、彼らは驚いて言った、「この人は、この知恵とこれら  
 の力あるわざとを、どこで習ってきたのか。」

岩波版は〈…そこの会堂で人々を教えていた。そのため彼らは仰天し、…〉  
 と明確に訳している。Cf. ⑨Sav 前文のみにて欠 ; Ass 前文のみにて欠 ;  
 Mar ЪКО ; Ostr 前文のみにて欠 ; Arch 前文のみにて欠 ; Miro 前文のみ  
 にて欠 ; Vrac — ; 1997 ЈАКΩ.

次例⑩⑪は、Vajs が〈ЈАКО〉、Gr. テクスト〈ὅτι〉とするものである。  
 ただし、⑩の Gr. テクストはいわゆる verba dicendi et sentiendi につづき、  
 その内容を示す副文章を導くものであり、〈〜と〉の意。⑪の Gr. テクスト  
 は理由を示すものであり、〈〜が故に〉の意である。

⑩ Mc 14.71 (115b-12) : ОНЪ ЖЕ НАЧА КЛАТИ СА И ПРОКЛІНАТИ  
 СА. ЈАКО ЖЕ НЕ ВЪДѢ ЧЛ(О)ВКА СЕГО ЮГО ЖЕ ГЛІЮТЕ.; し  
 かし、彼は、「あなたがたの話しているその人のことは何も知らない」  
 と言い張って、激しく誓いはじめた。

Cf. ⑩Sav — ; Ass — ; Mar ЪКО ; Zog ЪКО ; Ostr ЈАКО ; Arch — ;  
 Vosk Mst ЈАКОЖЕ, Gal АКО ; Miro — ; Vrac — ; 1997 ЈАКΩ.

- ⑩ Mt 24.44 (66b-25) : СЕГО РАДИ И ВЫ БОУДѢТЕ ГОТОВИ. ЯКО ЖЕ ВЪ НЬ ЖЕ ЧАСЪ НЕ МЪНИТЕ. СЫНЪ ЧЛОВѢЧЬ ПРИДЕТЬ : ~ ; だから、あなたがたも用意をしないで下さい。思いがけない時に人の子が来るからである。

岩波版は〈…備えて下さい。というのは、…来るからである。〉と文字通りに訳す。なおこの verse の平行記事が L 12.40 にあり、Mst で次のように〈ЯКО〉とある。

- ⑪' L 12.40 (97a-11) : И ВЫ БОУДѢТЕ ГОТОВИ. ЯКО ВЪ НЬ ЖЕ ЧАСЪ НЕ МЪНИТЕ. СНЪ ЧЛ(О)ВЧЬ ПРИДЕТЬ : ~

Cf. ⑩Sav ЯКО ; Ass ЪКО ; Mar ЪКО ; Ostr ЯКО(84, 147) ; Arch ЯКО ; Miro ЪКО ; Vrac ЯКО ; 1997 ЯКΩ. ⑩⑪も一綴りで良い。

次に Vajs 〈ЯКО : ως〉とする例。〈ως〉は〈～のように〉の意。

- ⑫ Mt 12.13 (189b-3) : ТЪГДА ГЛА ЧЛ(О)ВКОУ ПРОСТЪРИ РОУКОУ СВОЮ. И ПРОСТЪРЕ И ОУСТРОИ СА ЦѢЛА ЯКО ЖЕ И ДРОУГАЯ : ~ ;

ただし、この場合 Gr. テキスト 〈ως ἢ ἄλλη〉を〈ЯКО ЖЕ И ДРОУГАЯ〉と〈И〉を入れて訳している点に注目しなければならない。岩波版は〈もう一方の手と同じように〉に訳する。Cf. ⑫Sav — ; Ass — ; Mar ЪКО И ; Zog ЪКО I ; Ostr — ; Arch — ; Miro ЪКО И ; Vrac — ; 1997 ЯКΩのみ。この例も一綴りとしてよい。

次例は Vajs が〈ЯКО : ωσπερ〉とするが、次に〈И〉が続く、この点も問題とせざるを得ない。この〈ωσπερ〉は〈～のように〉の意。

- ⑬ L 18.11 (109r-8) : ФАРИСЕИ ЖЕ СТАВЪ СИЩЕ ВЪ СЕБѢ МОЛААШЕ СА. БѢ ХВАЛОУ ТЕБѢ ВЪЗДАЮ ЯКО НѢСМЪ ЯКО ЖЕ И ПРОЧИИ ЧЛ(О)ВЦИ. ГРАБИТЕЛѢ. НЕПРАВЪДЬНИЦИ. ПРЕЛЮБОДѢИ. ИЛИ АКЪ СЪ МЫТАРЬ. : パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貧欲な

者, 不正な者, 姦淫をする者ではなく, また, この取税人のような人間でもないことを感謝します。

Cf. ⑬ Sav ЁАКО І; Ass ЪКО И; Mar ЪКО И; Zog ЪКО І; Ostr ЁАКО И (116, 239); Arch ЁАКО И; Miro ЪКО И; Vrac; ЪКО[И]; 1997 ЁАКОЖЕのみ。

⑬も一綴りでよく, 1997 がこれを支持する。また上記 2 例での〈И〉の付加は, OCS での優れた意識ととることができよう。

次に問題とする Mc 11.23 は Mst に 2 箇所出てくる。ここにも特異な問題が存する。初めに Mst の例文を掲げ, 次に検討を加えたい。

⑭ Mc 11.23 (105r-13) : ПРАВО ГЛЮ ВАМЪ. ЁАКО ИЖЕ АШЦЕ РЕЧЕТЪ ГОРЪ СЕИ ВЪЗДВИГНИ СА И ВЪРЗИ СА ВЪ МОРЕ. И НЕ ОУСОУМЪНИТЬ СА ВЪ СРДЦИ СВОЮМЪ. НЪ ВЪРОУ ИМЕТЪ ЁАКО ЖЕ ГЛПЄТЬ. БОУДЕТЬ ЁМОУ ЁЖЕ АШЦЕ РЕЧЕТЪ : ~

⑮ Mc 11.23 (105r-24) : ПРАВО ГЛЮ ВАМЪ. ЁАКО ИЖЕ АШЦЕ РЕЧЕТЪ ГОРЪ СЕИ ВЪЗДВИГНИ СА И ВЪВЪРЗИ СА ВЪ МОРЕ. И НЕ ОУСОУМЪНИТ СА ВЪ СРДЦИ СВОЮМЪ. НЪ ВЪРОУ ИМЕТЪ ЁАКО ЖЕ ГЛПЄЪ БОУДЕТЬ ЁМѠ ЁЖЕ АШЦЕ РЕЧЕТЪ.

両文には小異が存するが今は問題としない。見るべきはともに二重下線部で示した〈ЁАКО ЖЕ〉である。Vajs の再構した文と, ともに掲げる Gr. テキストは次のごときである。

Vajs Mc 11.23 : АМИНЪ ГЛАГОЛѠ ВАМЪ, ЁАКО ИЖЕ АШТЕ РЕЧЕТЪ ГОРЪ СЕИ : ДВИГНИ СА И ВРЪСИ СА ВЪ МОРЕ, И НЕ ОУСѠМЪНИТЬ СА ВЪ СРЪДЬЦИ СВОЮМЪ, НЪ ВЪРѠ ИМЕТЪ, ЁАКО ЁЖЕ ГЛАГОЛЄТЬ БЫВАЮТЬ, БѠДСТЪ ЁМОУ, ЁЖЕ АШТЕ РЕЧЕТЪ. ; *ἀμὴν λέγω ὑμῖν, ὅτι ὃς ἂν εἴπῃ τῷ ὄρει τούτῳ, Ἄρθητι καὶ βλήθητι εἰς τὴν θάλασσαν, καὶ μὴ διακριθῆ ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ, ἀλλὰ πιστεύσῃ, ὅτι ἃ λέγει γίνεται, ἔσται αὐτῷ ὃ ἐὰν εἴπῃ. ;*

よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中には  
いれと言ひ、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるな  
ら、そのとおりに成るであろう。\* Nestle-Aland 27 版は句読法、文字の大  
小を除けばほぼ同じ。ただし Vajs は最後部を次のようにする：*ὅτι ὁ λαλεῖ  
γίνεται, ἔσται αὐτῷ*。

Vajs は 〈IAKO : ὅτι〉 とするわけだが、この 〈ὅτι〉 は⑩同様、verba dicendi  
et sentiendi に続く副文章を導くものである。ところが、この Mc 11.23 の  
文中に同一の機能をもつもうひとつの 〈IAKO : ὅτι〉 が存する。文頭に近い  
〈IAKO ИЖЕ АШТЕ…〉である。しかしながら、Mst はこの句を⑭⑮ともに  
〈IAKO〉のまま残している。Vajs が 〈ὅτι ὁς ἀν εἴπη…〉, 〈ὅτι ἀν λέγει…〉  
に対し各々 〈IAKO ИЖЕ АШТЕ РЕЧЕТЪ〉, 〈IAKO ЮЖЕ ГЛАГОЛЕТЪ〉  
と再構し、文の構造上は同じとみてよい。Mst の後者 〈IAKO ЖЕ〉は一綴  
りで、かつこの 〈IAKO ЮЖЕ〉の融合形とはみられぬであろうか。ただ、  
次に示すように、canon の Zog にもこの形態が認められるから、Mst のみ  
の特異な現象ではあるまい。Cf. ⑭⑮Sav — ; Ass — ; Mar ЪКО ИЖЕ…  
ЪКО ЄЖЕ ; Zog ЪКО ЛЖЕ АШТЕ…ЪКОЖЕ ; Ostr IAKO ИЖЕ АШЕ…  
IAKO ЮЖЕ ; Arch IAKO ИЖЕ…IAKOЖЕ ; Vosk Mst IAKO ИЖЕ АШЕ…  
IAKOЖЕ, Gal И(КО) ИЖЕ АШЕ…IAKOЖЕ ; Miro ЪКО АШЕ…ЪКОЖЕ  
(1406), ЪКОЖЕ АШЕ…ЪКОЖЕ(349B) ; Vrac<sup>(13)</sup> IAKO ИЖЕ АШЕ…IAKO  
ЄЖЕ ; 1997 IAKΩ, ИЖЕ АШЕ…IAKΩ ЄЖЕ \* Miro 349B の前の 〈ЪКОЖЕ〉は  
問題にすべきだが、おそらく〈ЪКО〉と同価の〈ЪКОЖЕ〉を用いたものか。融合形で  
はないと考えるが、しばらく措く。

#### 4) Vajs : ДА

このケースは Mst に 3 箇所ある。いずれも Gr. テキストは 〈ὅπως〉である。

- ⑯ Mc 5.23 (60B-3) : И МОЛААШЕ И МНОГО ГЛА. IAKO ДЪЩИ  
МОЯ НА КОНЪЧИНЪ ЮСТЬ. ДА ПРИШЪДЪ ВЪЗЛОЖИШИ НА  
НЮ РОУЦЪ IAKO ЖЕ ИСЦЪЛЪЮЕТЪ И ЖИВА БОУДЕТЬ. ; しきり

に願って言った、「わたしの幼い娘が死にかかっています。どうぞ、その子がなおって助かりますように、おいでになって、手をおいてやってください」。

上例の場合、〈ὄπως〉は目的を示すもので、〈～のために〉の意。岩波版は〈…娘に両手を置いてやって下さい。そうすれば娘は救われ、…〉と訳する。比較・対照は、先行しているもう一つの〈DA〉をも含めて次に示す。Cf. ⑩Sav — ; Ass — ; Mar DA…DA ; Zog DA…DA ; Ostr — ; Arch — ; Vosk Mst DA…ЯКОЖЕ, Gal DA…DA ; Miro DA…DA ; Vrac — ; 1977 DA…ЯΚΩ DA.

⑩ Mt 22.15 (57r-12) : ВЪ ОНО ВРѢМА. СЪВѢТЪ СЪТВОРИША ФАРИСЕИ НА ІСА. ЯКО ЖЕ И ОСИЛИТИ И СЛОВЕСЬМЪ. ; そのときパリサイ人たちがきて、どうかしてイエスを言葉のわなにかけようと、相談をした。

この例での〈ὄπως〉は〈どのような仕方〉の意である。Cf. ⑩Sav ЯКО DA ; Ass DA ; Mar DA ; Ostr DA ; Arch DA ; Miro DA ; Vrac DA ; 1977 ЯΚΩ DA. Gr. テクストに対し、OCS 訳は Sav など目的の意に意識しているようにみられる。

⑪ Mt 23.35 (135v-11) : ЯКО ЖЕ ДА ПРИДЕТЬ НА ВЪ ВСАКА КРѢВЬ ПРАВЪДЬНА ПРОЛИВАЮМА НА ЗЕМЛЮ. ОТЪ КРѢВИ АВЕЛѦ ПРАВЪДЬНААГО ДО КРѢВИ ЗАХАРИѦ СНА ВАРАХИИНА. ЯГОЖЕ ОУБИСТЕ МЕЖЮ ЦРКВИЮ И ОЛТАРЬМЪ. ; こうして義人アベルの血から、聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう。

上例での〈ὄπως〉は〈ὅνα〉に近い用法と考えられ、〈その結果／かくして〉のほどの意か。目的と区別しにくく、Mst の〈ЯКО ЖЕ ДА〉は〈ЯКО ДА〉と同義で、目的のごとくに訳したものと考える。Cf. ⑪Sav — ;

Ass ДА ; Mar ДА ; Ostr ДА ; Arch ДА ; Miro ДА ; Vrac ДА ; 1977 ЯКОΩ  
ДА.

⑯⑰⑱の〈ЯКО ЖЕ〉は一綴りでよい。

5) Vajs : ДА ЯКО

この例は〈ЯКО〉の項でとり上げるべきであったかも知れないが、今こ  
こで検討する。Mst は次のようである。

⑲ J 18.6 (149r-7) : ГЛА ИМЪ ІСЪ АЗЪ ЮСМЪ. СТОЯАШЕ ЖЕ  
ИЮДА ИЖЕ ЮГО ПРЕДААШЕ СЪ НИМИ. ДА ЯКО ЖЕ РЧЕ  
ИМЪ АЗЪ ЮСМЪ ИДОША ВЪСПАТЬ И ПАДОША НА ЗЕМЛИ;  
イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切っ  
たユダも、彼らと一緒に立っていた。イエスが彼らに「わたしが、そ  
れである」と言われたとき、彼らはいしりに引きさがって地に倒れた。  
\*今日では〈ДА…〉以下を J 18.6 とするのが通常。今、Ž に従う。

〈ДА ЯКО〉に対し、Vajs は〈Ως οὖν〉と対応させる。結論的に言えば、  
〈οὖν〉を〈ДА〉と、〈ως〉を〈ЯКО〉と訳したのであろう。〈οὖν〉はこの  
場合〈そこで／それから〉ほどの意。言うまでもなく〈οὖν〉は文頭に立つ  
ことはないから、OSC での語順には反映されない。〈ως〉は〈～の時〉の意。  
岩波版は〈さて、彼らに「私はいる」と言うと、人々は後ずさりして地面に  
倒れた。〉とする。よって⑲ 〈ДА ЯКО ЖЕ〉の後 2 語は一綴りでよい。

Cf. ⑲Sav ДА ЯКО ; Ass ЪКО ; Mar ДА ЪКО ; Zog ДА ЪКО ; Ostr ДА  
ЯКО ; Arch — ; Miro ДА ЯКО ; Vrac ДА ЯКО ЖЕ ; 1997 ЄГДА ЖЕ.

6) Vajs : ИБО

⑳ L 11.4 (826-16) : И ОСТАВИ НАМЪ ГРЪХЫ НАША ЯКО ЖЕ  
И МЫ ОСТАВЛАЕМЪ ВСАКОМѢ ДЪЛЪЖНИКОУ НАШЕМОУ.  
И НЕ ВЪВЕДИ НАСЪ ВЪ ИСКОУШЕНИЕ НЪ ИЗБАВИ НЫ ОТЪ  
НЄПРИЯЗНИ.; わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わ  
たしたちの罪をもおゆるしてください。わたしたちを試みに会わせない

てください』】。

Vajsには〈καὶ γάρ〉とGr. テキストがある。これは〈なぜなら～も又／なぜならば〉ほどの意。㊟も一綴りでよい。岩波版には〈また、私たちの罪をお赦し下さい、私たちに負債ある者をことごとく、私たち自身も赦しますから。そして、私たちを試みに遭わせないで下さい。〉とある。Cf. ㊟Vajs ИБО И САМИ; Sav ИБО И САМИ; Ass —; Mar ИБО И САМИ; Zog ИБО И САМИ; Ostr ИАКО И МЪ; Arch ИАКО МЪ; Miro ИБО И САМИ; Vrac —; 1997 ИБО И САМИ.

#### 7) Vajs: 関係代名詞の諸形

その第1はVajsが〈ИЖЕ: τί〉とするもの。

㊟ Mc 14.36 (1146-2): И ГЛААШЕ ОЧЕ ВСЕ МОЩНО ТЪБЪ МИМО НЕСИ ЧАШЮ СИЮ ОТЪ МЕНЕ. НЪ НЕ ИАКО АЗЪ ХОЩЮ НЪ ИАКО ЖЕ ТЪ. ; 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。

この〈τί〉は関係代名詞の代用に用いられるコイナーの用法である。これをOCSは中性形関係代名詞で訳した。岩波版は最後の部分を〈しかし、私の望むことではなく、あなたの望まれることを〉と訳す。しかし、OCSの一部は意識して〈～のように〉と、ともに〈ИАКО〉に訳すものがある。Mstは〈ИАКОЖЕ〉と一綴りでよい。なお、〈НЪ〉以下の比較は下に記すが、Gr. テキストはVajs 1927が〈ἀλλ' οὐ τί ἐγὼ θέλω, ἀλλὰ τί σὺ.〉(〈:·НЪ НЕ ЪКО АЗЪ ХОШТѢ НЪ ЄЖЕ ТЪ.〉) とするのに対し、Vajs 1935は〈ἀλλ' οὐ ὡς ἐγὼ θέλω, ἀλλὰ τί σὺ.〉と変更している(どちらも有注)。Cf. ㊟Vajs НЪ НЕ ИАКО…НЪ ИЖЕ ТЪ; Sav —; Ass —; Mar :·НЪ НЕ ЪКО…НЪ ЄЖЕ ТЪ; Zog НЪ НЕ ЪКО…НЪ ЄЖЕ ТЪ; Ostr —; Arch —; Vosk Mst НЪ НЕ ИАКО…НЪ ИАКОЖЕ ТЪ, Gal НЪ НЕ ИАКО…НЪ ИЖЕ ТЪ; Miro —; Vrac —; 1997 NO НЕ ЄЖЕ…NO ЄЖЕ ТЪ.

第2は Vajs が 〈IAЖЕ:ǎ〉とするもの。ともに関係代名詞・中性・複数・対格で、直訳である。

㊸ L 12.12 (86a-18) : СТЫИ БО ДХЪ ПАОУЧИТЬ ВЫ ВЪ ТЪ ЧАСЬ. IAKO ЖЕ ПОДОБАЮТЬ ГЛАГОЛАТИ: ~; 言うべきことは、精霊がその時に教えてくださるからである」。

Gr. テクストの関係代名詞は先行詞なしで、〈教える〉内容を表わすものである。これを意識して 〈IAKO/IAKOЖЕ〉としたものか。したがって㊸も一綴りでよい。Cf. ㊸Sav —; Ass ЪЖЕ; Mar ЪЖЕ; Zog ЪКОЖЕ; Ostr IAЖЕ; Arch IAKOЖЕ; Miro ЄЖЕ; Vrac IAKO ЖЕ; 1997 IAЖЕ。

第3は 〈IAЖЕ:ǎ〉とし、ともに関係代名詞だが、ともに先行詞を有する。〈IAЖЕ〉のそれは 〈ОВЬЦА〉であるが、意味上、〈IAЖЕ〉は女性・複数・主格である。これに対し 〈ǎ〉の先行詞は 〈прѡвѡта〉で、中性・複数・主格である。

㊹ J 10.16 (165a-1) : И ЇНЫ ОВЬЦА ИМАМЪ IAKO ЖЕ НЕ СОУТЬ ОТЪ ДВОРА СЕГО И ТЫ МИ ПОДОБАЮТЬ ПРИВЕСТИ. И ГЛАСЬ МОИ ОУСЛЫШАТЬ. И БОУДЕТЬ ЮДИНО СТАДО И ЮДИНЪ ПАСТОУХЪ: ~; わたしはまた、この囲いにはない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、私の声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

Cf. ㊹Sav AJЖЕ; Ass IAЖЕ; Mar IAЖЕ; Zog IAЖЕ; Ostr IAЖЕ; Arch IAЖЕ; Miro ЄЖЕ; Vrac —; 1997 IAЖЕ。ちなみに2004年ロシア聖書協会訳は〈Есть у Меня и другие овцы, которые…〉と関係代名詞を用いて訳している。以上、Mstの〈IAKO ЖЕ〉とどのように関連づけることができるであろうか。繰り返しになるが、Gr. テクストは、先行詞を有する関係代名詞である。

さて、ここにこのケースを解釈する上で、ヒントとなる例が存する。Mt 24.21 である (下線筆者)。

Vajs Mt 24.21 : БѣДЕТЬ БО ТОГДА СКРЪБЬ ВЕЛЪЯ, ЅАКАЖЕ НЪСТЪ БЫЛА ОТЪ НАЧАЛА ВЪСЕГО МИРОУ ДО СЕЛЪ, НИ ИМАТЬ БЫТИ. ; Ἔσται γὰρ τότε θλίψις μεγάλη, οἷα οὐ γέγομεν ἀπ' ἀρχῆς κόσμου ἕως τοῦ νῦν, οὐδ' οὐ μὴ γένηται ; その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてもなく今後もないような大きな患難が起るからである。

ここでは Gr. テクストの関係代名詞 <οἷος> の女性・単数・主格形 <οἷα> に対し (先行詞は <θλίψις>), OCS は同じく関係代名詞の <ЅАКЪЖЕ> の女性・単数・主格形によって、忠実に訳している (先行詞は <СКРЪБЬ>). <οἷος> の意味にではなく、関係代名詞である点に注目してほしい。諸本もほぼこれを踏襲しているとみられる。Cf. Sav ЅАКАЖЕ ; Ass ЋКАЖЕ ; Mar ЋКАЖЕ ; Zog ЋКАЖЕ ; Ostr ЅАКАЖЕ ; Arch — ; Miro ЋКАЖЕ (1016, 234a) ; Vrac — ; 1997 ЅАКАЖЕ. なお 2004 年ロシア聖書協会訳 : какой. ただし, SJS によれば, 15 世紀セルビアの Tetra-evangelium Nikoljanum は該所を <ЅКОЖЕ> とするとある。ここでは、関係代名詞としての <οἷος> の形態よりも、その意味である <~のような> に、文意の重心が移ったためではなかろうか。そして, Mst ではつぎのように Mt 24.21 の該所を <ЅАКО/ЅАКО ЖЕ> としているのである。

Mst Mt 24.21 (52b-2) : БОУДЕТЬ БО ТЪГДА ПЕЧАЛЬ ВЕЛИКА ЅАКО НЪСТЪ БЫЛА ОТЪ НАЧАЛА ТВАРИ СЕЯ. ДОЖЕ И ДО ПЫНЪ НЕ ИМАТЬ БЫТИ. ; (132b-25) : БОУДЕТЬ БО ТЪГДА ПЕЧАЛЬ ВЕЛИКА ЅАКО ЖЕ НЪСТЪ БЫЛА ОТЪ НАЧАЛА МИРА ДОЖЕ И ДОСЕЛЪ НИ ИМАТЬ БЫТИ.

一種の意識とみてよい<sup>(14)</sup>。したがって, ㊸も一綴りでよい。

4. 前節で具体的に検討した 23 箇所は, すべて <ЅАКОЖЕ> と一綴りでよいと結論づけられる。Vajs が <ЅАКО ЖЕ> と推定した箇所も, Mst は

〈ІАКОЖЕ〉と結論してよい。

〈ІАКОЖЕ〉一語にかかわる小さな問題であったが、一方では、上掲した他本との比較・対照から十分に読みとれると考えるが、次のような点にも言及しうるのであろう。最初期から用いられていた一綴りの〈ІАКОЖЕ〉に直結しうるのはむしろ Mst に存在するものの、少数であること。すなわち、*canon* と Mst の間には複数回の *reduction* の問題が横たわっており、このたび重なる *reduction* は、自然の流れとは言いながら、元来のテキストの解釈からそれに基づく言い換えへと、さらに *periphrasis* へと向かって行く。他方、語彙の〈ІАКО〉は、種々にわたる意味と用法を *reduction* の途次において荷なわされることになった。加えて、東スラブに滔滔と流れる口語的伝統に沿ってと筆者は想像するが、強意の〈ЖЕ〉への嗜好が作用したのではないか。これには音調もかかわるであろう。古くから用いられる〈А〉の多用や、現代ロシア語における *diminutives* への偏愛などと、軸を一にするものと考えうる。こうした性向が、広義・多用法を有する語彙に肥大した——換言すれば汎用性に富んだ——〈ІАКО〉に結びつき、〈ІАКОЖЕ〉が〈ІАКО〉と同じく用いられている。これが Mst の〈ІАКОЖЕ〉ではないか。

Mst の〈ІАКОЖЕ〉は、用法・意味ともに繁雑になりすぎた。しかし、かかるルースさは、ある意味でロシア的と言いうるのではないか。Arch でさえ、Mst と比較した時、その間に断続が感得され、古写本に近いとさえ相対的には言える。だが Mst 以降、次にこの意味・用法の検証が生じてくる。現行のロシア教会スラブ語聖書は、Mst の立場から、古きに戻ろうかとするかのようである。

まとめとして 〈ЖЕ〉が前の語に続くか否か、Mst での少数例に限って具体的に検討してきたが、結句、その文が何を言いたいか、ということにひとえにかかるとに帰結する。ロシア人にとって 〈ЖЕ〉を独立して綴ろうと否と、文の意を感知できる者にとっては、本稿の作業は無為に近いである

う。しかしながら、Mst でのルースな多様性を分析し、判断することは、我々外国のスラビストにとってはそれなりの意味を有するであろう。最近 Алексеев<sup>(15)</sup>らによってなされている一連のスラブ訳聖書の労作には眼を瞪るものがある。しかし、文意を第一とした時、Mst 以下の特にロシア後代の写本の扱いにやや不安を感じる。Particula などの研究には、やや堪えないのではないか。Алексеев らの企図に拍手をおくる一方、各写本類の写真や刊本をまず出刊してもらいたいと思うのは、筆者ひとりではなからう。斯学のために切にこれを希望したい。

【謝辞】 稀釈書等につき、一橋大学の中島由美さんほか、諸兄姉の協力を得ました。記して謝意を表します。

#### 注

- (1) 参照：岩井憲幸『ムスチスラブ福音書』における重出テキストについて——マタイ伝の場合——「芸芸研究」第101号、2007年2月；『ムスチスラブ福音書』における重出テキストの問題——ヨハネ伝の場合——「明治大学教養論集」通巻426号、2008年1月。
- (2) 参照：岩井憲幸・服部文昭「古代教会スラブ語の地方的変種から古代ロシア文語の萌芽にかかわる研究——「アルハンゲリスク福音書」を中心として——」、平成10年3月；「古代ロシア文語の萌芽期における特性の研究——「アルハンゲリスク福音書」を中心として——」、平成14年3月；「古代ロシア文語萌芽期の第二段階におけるハイブリッド性の多様さと重層性について」、平成18年3月。(いずれも科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)。
- (3) 計60箇所ほど。
- (4) SJS(参考文献B1), t. 1, pp. LXX-LXXXIII. なお〈glag.〉は〈グラゴル文字〉, 〈cyr.〉は〈キリル文字〉を示す。
- (5) Н. Н. Дурново, Введение в историю русского языка, М., 1969, p. 57.
- (6) 引用に際しては他本と同様に、便宜的に大文字をもって行なう。
- (7) ゴチック体を用いて表示されている。
- (8) 以下で比較・対照する他写本における使用語彙の違いは、一部これに起因する可能性がある。
- (9) 〈—〉は当該 verse 自体の欠在を示す。なお Cf. 以下の他写本の表示順は、reduction の問題を前面におし出さんがためである。
- (10) Nestle-Aland:  $\omega\varsigma \gamma\acute{\alpha}\rho$ .

- (11) K. H. Meyer, Altkirchenslavisch-griechisches Wörterbuch des Codex Suprasliensis, Verlag J. J. Augustin, Glückstadt und Hamburg, 1935.
- (12) 参考文献 B を見よ。なお Срезневский は一綴りの 〈ІАКОЖС〉 を見出し語として出していない、この点、後の旧ソ連邦での方式に連なっている。
- (13) 通常と異なり、verse の No. を Mc 11.22 とする。
- (14) Gr. テキストは異文なし。
- (15) 参考文献 A を見よ。

参考文献 (\*本文および注で掲出したものは省く。)

A. テキスト

- 1) Quattuor evangeliorum ... Codex Marianus glagoliticus, ed. V. Jagić, Berolini-SPb., 1883. (Rep. 1960, Graz).
- 2) Quattuor evangeliorum Codex glagoliticus olim Zographensis ..., ed. V. Jagić, Berolini, 1879. (Rep. 1954, Graz).
- 3) J. Kunz (ed.), Evangeliarium Assemani, Tom II, Pragaе, 1955.
- 4) В. Шепкинъ, Саввина книга, СПб., 1903. (Rep. 1959, Graz).
- 5) О. А. Князевская и др., Саввина книга; Древнеславянская рукопись XI, XI-XII и конца XIII века, ч. 1, М., 1999.
- 6) А. Востоковъ, Остромирово евангелие 1056-57 года, СПб., 1843 (Rep. 1964, Wiesbaden).
- 7) Архангельское евангелие 1092 года, Издание Румянцовскаго музея, М., 1912. (写真複製版および私家版翻刻による。)
- 8) Л. П. Жуковская и др., Архангельское евангелие 1092 года, М., 1997.
- 9) Б. Цоневъ, Врачанско евангелие; Български старини, к. IV, София, 1914.
- 10) Н. Родић-Г. Јовановић, Мирослављево јеванђеље, Београд, 1986.
- 11) А. А. Алексеев и др., Евангелие от Иоанна в славянской традиции, Российское библейское общество, СПб., 1998; Евангелие от Матфея в славянской традиции, РБО, СПб., 2005.
- 12) Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, 27. revidierte Auflage, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart.
- 13) Библия, Книги священного писания ветхого и нового завета; Канонические, В русском переводе [...], Российское библейское общество, М., 2004.
- 14) 聖書, 日本聖書協会, 1974.
- 15) 佐藤研訳, マルコによる福音書 マタイによる福音書, 岩波書店, 1995; 佐藤研・大貫隆訳, ルカ文書, 岩波書店, 1995; 小林稔・大貫隆訳, ヨハネ文書, 岩波書店, 1995.

**B. 辞典**

- 1) Slovník jazyka staroslověnského, Praha, 1966-1997. (Rep. Словарь старославянского языка, СПб., 2006).
- 2) Р. М. Цейтлин и др., Старославянский словарь (по рукописям X-XI веков), М., 1994.
- 3) И. И. Срезневский, Материалы для словаря древнерусского языка [...], СПб., 1893-1903. (Rep. 1958, М.; 1971 Graz).
- 4) W. Bauer, Griechische-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments [...], Gießen, 1928.
- 5) W. F. Arndt-F. W. Gingrich, A Greek-English Lexicon of the New Testament [...], Chicago, 1957; 2nd ed., 1979.

**C. 文法書その他**

- 1) 木村彰一, 古代教会スラブ語入門, 白水社, 1985.
- 2) H. G. Lunt, Old Church Slavonic Grammar, 'S-Gravenhage, 1955; 7th revised ed., Berlin-N. Y., 2001.
- 3) V. Kiparsky, Russische historische Grammatik, I-III, Heidelberg, 1963.
- 4) Л. П. Жуковская, Текстология и язык древнейших славянских памятников, М., 1976.
- 5) Н. А. Мещерский, История русского литературного языка, Л., 1981.
- 6) M. Garzaniti, Die altslavische Version der Evangelien, Köln-Weimar-Wien, 2001.
- 7) Е. В. Уханова, <К вопросу о месте Мстиславова евангелия в культуре Древней Руси конца XI- начала XII в.>, Palaeoslavica, Vol. 14-2006, Cambridge, M. A.
- 8) А. А. Зализняк, Древнерусские энклитики, М., 2008.
- 9) F. Blass-A. Debrunner, Grammatik des neutestamentlichen Griechisch, 9. Auflage, Göttingen, 1954.
- 10) R. W. Funk (transl. and ed.), A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature, Chicago-London, 1961.

【本稿は平成18年度～平成21年度文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C), 課題番号:18520239)による研究成果の一部である。】

(いらい・のりゆき 文学部教授)